

よろこびのうた

— 第44回 かまいしの第九 —

「かまいしの第九（以下、「第九」）」は故・渡邊顯磨さん^{あきまさ}が提唱し1978年に発足。同年、釜石市民文化会館の落成記念式典として第1回公演を迎えて以来、45年にわたり釜石の年末を彩ってきました。昨年12月17日、万雷の拍手を受けて一旦の終止符を打った「第九」を振り返ります。

※元宝樹寺住職、東京荒川少年少女合唱隊を創設



「第九」と歩んだ45年



かまいしの第九実行委員会
会長 川向 修一 さん

「自身は第1回から参加されています。きっかけは？」

当時、私は就職したばかりの新人新聞記者でした。その年の12月に第1回「第九」が開催されるというので、4月に発会式を取材しました。その時、渡邊先生から言われた「君もやつてみないか」の一言。音楽の専門教育を受けたわけでもない私が、その後45年にわたって歌い続け、また演奏会を運営することになるとは、その時、思ってもいませんでした。

「長く続ける上で運営に『苦労もされたのでは？』

活動を続ける上で特に苦労したのは、オーケストラに演奏してもらうことです。プロのオーケストラを招いて演奏してもらうには多額の費用がかかります。釜石は都市部から遠く離れているため旅費も高額です。そこで86年からは人脈も駆使しながら有志のオーケストラメンバーを募るなどの工夫をしました。奏者を確保するために県内を頼んで回るのは大変でしたが、それだけに、その年のリハーサルでオーケストラの奏てる音が

流れ出した時は充実感で涙が出るような思いでした。結果的に、そういう手作りの感じが合唱団とオーケストラの気持ちも近づけたと思いますし、市内の中学生が出演する「オーケストラと歌おう」の企画や、ヘンデル『メサイア』、モーツアルト『レクイエム』といった大曲にも挑戦できる自由度につながり、釜石独自の演奏会を作つてこられたのかなと思います。

特に思い出深い回はありますか？

2011年の第34回、東日本大震災の年ですね。その年出演予定の釜石東中学校は被災し「今年はとても無理だろう」と思いました。ところが、生徒たちが「それでもやりたい」と。仮設住宅や散り散りになつた仮設校舎で練習をして、ドイツ語の歌詞を暗譜してきました。全校生徒が第九を歌い切った時のあの感動——。「これはもうやめるわけにはいかない」という思いで今まで活動をつないできました。「第九」がこれまで続いたのは本当に生徒たちのおかげです。

活動を終えることへの思いは？

活動資金のことや中核メンバーの高齢化（だんだんとこの世を去る仲間も増えてきました）もあります。渡邊先生が提唱した「音楽を通して、より良く生きることを学ぶ場」、自分たちが培つてきた合唱への取り組み方を守っていくのが難しくなってきた、という感覚もあり、新たな取り組みの芽生えを期待しながら一区切りとすることにしました。

「第九」は毎年来てくれるお客さんも多く、特に今回の演奏会はステージと観客席が一つになり、客席からも歌声が聞こえてくるような一体感を合唱団・オーケストラ一同感じています。応援していただいた皆さんのおかげで、いい形で区切りができたと思います。本当にありがとうございました。

みんなで歌う楽しさを実感できるように

「かまいしの第九」には小学生のころから参加してきましたが、今回、初めて合唱指導をするに当たり「音楽の専門家ではない私でいいのだろうか」「合唱経験も、参加の理由もさまざまな第九の会のメンバーから受け入れてもらえるだろうか」という思いもありました。

それでも引き受けたのは、合唱の師である渡邊先生が作られた「親と子の合唱団ノイホフ・クワイア」で小学生から指導を受けていたこと、現在は同団体で指導もしていることもあります。「楽譜が読めなくても、歌が下手でもよい、子どももお年寄りも誰が歌ってもよい。みんなで歌う楽しさを実感できるようにしたい」という理想を「第九」の場でも共有していきたいという理由からでした。

第九は音域が広く難しい曲ですが、オーケストラと合唱が共演する特別な曲でもあります。「群青」「明日を」も含めて週1回の練習や、それぞれでの自主練習を重ねることで、なんとかやりきれたと感じています。

当日はこれまで以上に沢山の観客に来場いただき、歌い終えると同時に「ブランボー！」の掛け声に続く盛大な拍手を頂いたときは、何十年も皆で積み上げた経験の成果だと感じ、感動を感じました。

人口減少のためか音楽団体も減りつつありますが「みんなで音楽を作り上げることの受け皿を残しておきたい」という思いで「親と子の合唱団ノイホフ・クワイア」の指導も継続しようと思います。「かまいしの第九」も一旦は区切りを迎ますが、思い出や歌う楽しさは忘れないでほしいと思いますし、それらが新しい方向性で咲いてくれればと思います。



合唱指導
小澤 一郎 さん

きっとまた会おう あの街で会おう
僕らの約束は 消えはしない

『群青』より

またみんなで演奏できることを祈って

音楽の師である山崎真行先生から急遽、指揮を受け継いだ前回の「第九」。重責であると同時に光榮で「釜石のためにできることをしたい、渡邊先生から引き継がれて来た火を絶やせない」と震える足をなだめながら、がむしゃらに駆け抜けた本番でした。

そして今年。ファイナルコンサートだからこそ、これまでとは変化を持たせて爪痕を残そうと挑みました。具体的には、オーケストラの配置など演奏スタイルでベートーベンの時代への「原点回帰」を、バーレンライター新版という新しい時代の楽譜を用いることで「新しさ」を両立することに挑戦し、仲間たち※と東京で練習に励んできました。

第九は演奏が70分ほどと長く、合唱団の皆さんに気持ちよく歌ってもらうための目配りも必要な複雑な曲ですが「無事に最終回を終えるよりも、乱れてもいいから奏者一人一人がそれぞれこのコンサートにかける思いを乗せてもらおう」というつもりで指揮棒を振りました。小さい時から知っている合唱・オーケストラの皆さんと演奏会ができるのは幸せな時間だったと感じています。

釜石は先人が起こした芸術文化の火を守ってきた土地。現在の「第九」の形が終わっても、市民の皆さんと音楽・芸術を楽しむ場が続き、またみんなで演奏できる日が来ることを祈っています。

※瓦田さんが主宰し、当日も演奏をしたオーケストラ「ムジカ・プロムナード」



指揮者
瓦田 尚 さん

